

# 保育者の非認知能力が保育の質に与える影響

Influence of childcare workers non-cognitive abilities on the quality of early childhood education and care

蛭原正貴\*

## 概要

幼児教育分野で注目を集めている非認知能力であるが、その非認知能力を育む側である保育者の非認知能力に関しては、保育にどのような影響を与えるのかを含め、研究が進められていない。そこで、本研究では保育者自身の非認知能力が保育の質に影響を与えるかどうかを検討することとした。対象は保育者229名とし、非認知能力（セルフコントロール、肯定的自尊感情、否定的自尊感情）と保育実践力を測定した。その結果、肯定的自尊感情が保育実践力（生活環境の理解力、子ども理解に基づく関わり力、環境構成力）に影響を与え、セルフコントロールが子ども理解に基づく関わり力、環境構成力に影響を与えることが示された。

【キーワード】 非認知能力、保育の質

## 1. はじめに

近年、幼児教育において「非認知能力」が注目されている。非認知能力とは、認知能力（IQや学業成績などの直接数値化できる能力）以外の能力の総称であり、直接的に測定することのできない「人格」や「人間性」といった個人の特性等を広く指す言葉である。この非認知能力はもともと心理学分野で研究が進められていたが、経済学者であるHeckmanらの調査報告により幼児期の教育に注目が集まることとなった。Heckmanら（2010）は幼児を対象とした教育介入を行い、その後40年以上の追跡調査を行ったところ、調査対象者は非対象者に比べてより良い生活（犯罪率が低く、年収が高いなど）を送っていることが明らかとなった。この報告では、調査対象者と非対象者のIQを比較しており、小学校中学年以降においてその差はなくなっていっ

たにもかかわらず、40代での生活には明らかな差が生じていたことから、認知以外の能力、つまり、粘り強さや自制心などの非認知能力が影響を及ぼしていたと結論付けている。

先述したHeckmanらの報告から早期の教育介入に注目が集まり、乳幼児を対象とする保育現場においては、「保育の質」がこれまで以上に問われている。保育の質に関する研究については、ECERS（Early Childhood Environmental Rating Scale, Harms et al, 1980）やITERS（Infant/Toddler Environment Rating Scale, Harms et al, 1990）といった量的評価尺度が国際的に使用されてきたが、OECD（2006）が「志向性」「構造」「教育の概念と実践」「相互作用あるいはプロセス」「実施運営」「子どもの成果あるいはパフォーマンス」といった6つの観点を示したことから、日本においても保育過程の質を捉える量的評価尺度が徐々に使用されるようになってきている。例えば、藤澤・中室（2017）は、保育環境評価スケール（乳児版：ITERS）

\* 江戸川大学こどもコミュニケーション学科 講師

及び乳幼児発達スケール (KIDS) を用いて小規模保育園と中規模保育園の保育環境を比較したところ、全般的に小規模保育園の保育環境の質のほうが良好であったことを報告している。また、埋橋・岡部 (2019) は保育環境評価スケール (ECERS) を手引きとして利用し、対象幼稚園を数年にわたって調査した結果、保育者の意識や環境が改善したことを報告している。木村・橋川 (2008) の研究においては、自己評価ではあるが、保育実践力を量的な指標として捉える尺度の開発を行い、保育者の専門性に関わる要因を評価している。このように、「保育の質」を量的な評価として可視化することで、より具体的な改善策を講じることが可能となってきた。

保育の質を評価するための研究に併せて、保育の質を高めるための研究も進められている (山田, 2016; 八田, 2018; 井口, 2020)。特に、非認知能力の向上を目指した研究としては、幼児を対象とした指導法に関する研究が多数行われている (橋本, 2019; 西川, 2020; 胡, 2020)。一方で、質の高い保育を行うためには保育者自身の非認知能力を高める必要があるとの指摘もなされている。秋田ら (2015) は保育者自身の非認知能力を高めるために、保育者が異質な人と意見を交わし、他者との価値観の共通点や相違点を知り、自分のよさを自覚することが重要だと指摘している。また、黒澤ら (2015) は教師力 (教師の総合的な力量) を高めるためには、指導技術的な側面である「専門的力量」はもちろんのこと、人間の資質的な側面である「人間の力量」を高めることが必要であると指摘している。さらに、無藤 (2016) は保育者が非認知能力について深く理解し、遊びや生活に見通しをもつためには、非認知面の観点をもった園内研修が必要であることを指摘している。このような指摘は、保育者のもつ非認知能力が保育の質に影響を及ぼすことを示唆していると考えられる。しかしながら、保育者自身の非認知能力についてはほとんど研究が行われておらず、遠藤ら (2017) が乳児期から青年期までを対象とした大規模な非認知能力研究を行っているものの、保育者はもちろん、成人の非認知能力を対

象とした研究は見当たらない。保育者をもつ非認知能力の特徴や保育の質に影響する要因の特定ができれば、保育の質を向上させるための新たな視点の獲得が期待できる。例えば、個人レベルで保育の質を向上させようとした場合、多くの保育者が子ども理解に関する知識や保育技術の獲得、保育環境の改善といった方法を思い浮かべると推察する。しかし、そこで自身の日常生活における自制心や共感的態度といった非認知能力に目を向け、改善することができれば、これまでになかった方法で保育の質を高められる可能性がある。

そこで、本研究では保育者自身の非認知能力が保育の質に与える影響について検討する。

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象及び調査方法

N県内にある120園の幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園で勤務する保育者600名を対象として、郵送による質問紙調査を実施した。調査は無記名、自記式で行い、その結果270名からの回答を得た (回収率45.0%)。そのうち、欠損値のない229名を調査対象とした (有効回答率84.8%)。調査は2021年8月17日から9月17日までの約3週間で行い、調査依頼文には本調査が任意であること、返送をもって本研究に同意したとみなすこと、回答用紙は機密書類として適切に保管、破棄することなどを記載した。

### 2) 質問項目

本研究で焦点をあてる非認知能力はセルフコントロール (自制心)、自尊感情の2つである。数多くある非認知能力からこの2つを選んだ理由としては、乳児から青年期を対象とした教育的営為の中で、他の構成要素と比べた場合、相対的に変容可能性及び汎化可能性が高いとされているからである (遠藤, 2017)。本研究では成人を対象とするものの、生涯における可変性及び教育や環境等による成長可能性を示す知見が得られているコンピテンスであるため (遠藤, 2017)、先述した2つの尺度を用いることとした。

保育の質の測定には保育実践力尺度を選択し

た。保育実践力尺度は保育に関する知識やスキルを実践の中で活用する力を測定する尺度である。自己評価であるため、厳密には保育者自身による実践力の認知を対象とするものではあるが、保育の質に直結する保育実践力を量的に測定しうる唯一の尺度であることから、保育実践力尺度を用いることとした。

#### ①セルフコントロール尺度

セルフコントロールを測定する尺度として、Tangney et al. (2004) によって開発され、尾崎ら (2016) によって邦訳された Brief Self-Control Scale の短縮版 (BSCS-J) を使用した (全13項目)。質問項目は「全く当てはまらない (1)」から「とてもあてはまる (5)」の5段階で評定するよう回答を求めた。

#### ②自尊感情

自尊感情を測定する尺度として、Rosenberg Self-Esteem Scale の邦訳版 (RSES-J) (Mimura・Griffiths, 2007) を使用した (全10項目)。この尺度は1因子構造とされているものの、近年の研究では肯定的自尊感情 (5項目) と否定的自尊感情 (5項目) の2因子構造であることを指摘する研究もあることから (清水・吉田, 2008; 福留ら, 2017; 福留・森永, 2019), 1因子構造及び2因子構造で検証的因子分析を行った。その結果、2因子構造モデルの適合度のほうが高かったため、本研究では2因子構造として研究を進めた。質問項目は「強くそう思わない (1)」から「強くそう思う (4)」の4段階で評定するよう回答を求めた。

#### ③保育実践力

保育実践力を測定する尺度として、木村・橋川 (2008) が開発し、上山・杉村 (2015) が保育者用に再編した保育実践力尺度を使用した (全23項目)。この尺度は、生活環境の理解力 (8項目)、子ども理解に基づく関わり力 (9項目)、環境構成力 (6項目) で構成されている。質問項目は「全く当てはまらない (1)」から「とてもあてはまる (5)」の5段階で評定するよう回答を求めた。

### 3) 統計解析

各尺度の妥当性を検討するため検証的因子分析を行い、信頼性を検討するため、 $\alpha$ 係数による内的整合性を求めた。そして、各尺度の基本統計量及び相関関係を算出し、セルフコントロール尺度及び自尊感情尺度を独立変数、保育実践力尺度を従属変数とする重回帰分析を行った (強制役入法)。検証的因子分析及び重回帰分析における統計的な有意水準は5%とした。なお、統計解析ソフトは Amos 26 及び SPSS Statistics 27 を使用した。

## 3. 結果

### 1) 尺度の妥当性及び信頼性

各尺度の妥当性を検討するため、検証的因子分析を行ったところ、セルフコントロール尺度 ( $GFI = .886$ ,  $AGFI = .841$ ,  $CFI = .797$ ,  $RMSEA = .088$ ), 自尊感情尺度 ( $GFI = .943$ ,  $AGFI = .908$ ,  $CFI = .948$ ,  $RMSEA = .067$ ), 保育実践力尺度 ( $GFI = .832$ ,  $AGFI = .798$ ,  $CFI = .831$ ,  $RMSEA = .077$ ) といった、いずれも一定水準の許容範囲内である適合指標が示された。

各尺度の信頼性を検討するため、 $\alpha$ 係数による内的整合性を算出したところ、セルフコントロール尺度 .78, 自尊感情尺度 (肯定的自尊感情 .78, 否定的自尊感情 .77), 保育実践力尺度 (生活環境の理解力 .80, 子ども理解に基づく関わり力 .81, 環境構成力 .79) のいずれも一定水準以上の値が示された。

### 2) 尺度の相関関係

各尺度の基本統計量 (表1) 及び相関関係 (表2) を算出した。非認知能力と保育実践力との相関関係について、生活環境の理解力は肯定的自尊感情と弱い正の相関が示されたものの、その他の尺度とはほとんど相関がないことが示された。子ども理解に基づく関わり力と環境構成力については、セルフコントロール及び肯定的自尊感情と弱い正の相関が示され、否定的自尊感情とはほとんど相関がないことが示された。

表 1. 基本統計量

	平均値	標準偏差	歪度	尖度
セルフコントロール	3.0806	0.47123	-0.061	0.006
肯定的自尊感情	2.5354	0.44645	-0.452	0.627
否定的自尊感情	2.4487	0.50256	-0.193	0.560
生活環境の理解力	3.8766	0.33880	-0.129	2.026
子ども理解に基づく関わり力	3.7846	0.37544	-0.286	0.831
環境構成力	3.7482	0.41641	-0.837	2.586

表 2. 相関行列

	1	2	3	4	5	6
1 セルフコントロール	—					
2 肯定的自尊感情	.262**	—				
3 否定的自尊感情	.373**	.604**	—			
4 生活環境の理解力	.186**	.320**	.183**	—		
5 子ども理解に基づく関わり力	.226**	.281**	.175**	.790**	—	
6 環境構成力	.264**	.235**	.144*	.713**	.736**	—

\* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$ 

表 3. 重回帰分析の結果

従属変数	独立変数	$\beta$	t
生活環境の理解力	セルフコントロール	.12	1.83
	肯定的自尊感情	.32**	4.09
	否定的自尊感情	-.06	-.70
F		9.79	
R <sup>2</sup>		.12**	
Adj.R <sup>2</sup>		.10**	
子ども理解に基づく関わり力	セルフコントロール	.18*	2.58
	肯定的自尊感情	.27**	3.36
	否定的自尊感情	-.05	-.63
F		8.86	
R <sup>2</sup>		.11**	
Adj.R <sup>2</sup>		.09**	
環境構成力	セルフコントロール	.24**	3.44
	肯定的自尊感情	.22**	2.76
	否定的自尊感情	-.08	-.92
F		8.54	
R <sup>2</sup>		.10**	
Adj.R <sup>2</sup>		.09**	

\*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$

### 3) 重回帰分析

非認知能力（セルフコントロール、肯定的自尊感情、否定的自尊感情）を独立変数、保育実践力（生活環境の理解力、子ども理解に基づく関わり力、環境構成力）を従属変数として、強制投入法による重回帰分析を行った（表3）。

生活環境の理解力への影響として、肯定的自尊感情（ $\beta = .32$ ）からの影響が示された。肯定的自尊感情による生活環境の理解力の分散説明率は10.4%であった。子ども理解に基づく関わり力への影響として、セルフコントロール（ $\beta = .18$ ）及び肯定的自尊感情（ $\beta = .27$ ）からの影響が示された。これら2つの変数による子ども理解に基づく関わり力の分散説明率は9.4%であった。環境構成力への影響として、セルフコントロール（ $\beta = .24$ ）及び肯定的自尊感情（ $\beta = .22$ ）からの影響が示された。これら2つの変数による環境構成力の分散説明率は9.0%であった。

## 4. 考察

本研究の目的は、保育者のもつ非認知能力（自制心、自尊感情）が保育実践力に与える影響について検討することであった。

尺度間の相関関係については、セルフコントロールと2つの自尊感情との間に相関がみられたことに言及しておきたい。セルフコントロールと自尊感情の間に関係がみられることは先行研究においても報告されており（金子, 2013）、本研究の結果も同様に相関がみられた。2つの自尊感情のうち、否定的自尊感情とセルフコントロールの相関のほうが高かった理由については、否定的自尊感情を感じる場面のほうがセルフコントロールをより必要とするからであると考えられる。否定的自尊感情は「否定的自己像の拒否」と解釈されており（福留・森永, 2019）、否定的な評価を与えられたときにそれを拒否する反応とされている。そのため、セルフコントロールの「比較的望ましくない目標追及を抑制する」という一面とより類似性が高かったと考えられた。

重回帰分析の結果について、肯定的自尊感情が保育実践力に影響を与えることが明らかと

なった。自尊感情は、人の幅広い精神的健康や社会的な適応および成功といった特徴と密接な関連があると考えられており（箕浦・成田, 2015）、保育現場という日々変化の伴う環境下に適応するためには、高い自尊感情を備えてくことが望ましいと考えられる<sup>注1</sup>。なかでも、他の尺度と比べて影響力が大きく示された生活環境の理解力は、園生活はもちろん、家庭生活や社会生活といった生活環境全般への理解力を示した尺度であり、幅広い対応力が求められることから、より高い自尊感情が求められるのではないかと考えられる。

セルフコントロールについては、子ども理解に基づく関わり力、環境構成力への影響が示されたが、子ども理解に基づく関わり力、環境構成力は主に保育中に関わる項目が多いことから、セルフコントロールは保育中の出来事に影響を及ぼすと考えられる。セルフコントロールとは、複数の目標間に葛藤が生じたとき、長期的／抽象的／社会的な価値において比較的望ましい目標を追求し、望ましくない目標を抑制することとされており（尾崎ら, 2016）、保育中に生じる様々な葛藤場面で必要とされる能力であると考えられる。葛藤が生じた際、その場を収めるための対応ではなく、教育的・保育的配慮を踏まえた対応を選択することが保育の場におけるセルフコントロールの成功といえる。しかしながら、教育的・保育的配慮には正解がなく、どのような対応が適切であるというマニュアルがあるわけではない。そのため、各場面において教育的・保育的配慮を踏まえた対応とはどのようなものか、という思考を巡らせること自体が結果的に子ども理解に基づく関わり力、環境構成力へとつながっていくのではないかと考えられる。

本研究の限界としては、一部の非認知能力しか測定できていないこと、保育実践力尺度が自己評価であることが挙げられる。非認知能力とは認知能力以外の能力を示す幅の広い言葉であり、遠藤ら（2017）が行った大規模調査においても60以上の尺度が使用されている。本研究で測定した尺度はその中のわずか2つの尺度であり、その分析から保育者のもつ非認知能力が保

育実践力に影響を及ぼすとは断定できない。また、今回使用した保育実践力尺度は、あくまで自己評価であり、保育実践力の認知という捉え方となっている。そのため、保育現場における実践力を厳密に反映しているとはいえない。ただし、保育実践力を含む保育の質の捉え方には定義がなく、その測定方法についても多岐にわたっている。そのため、多様な尺度を使用した場合においても本研究と同様に、非認知能力からの影響が示されるかどうか検討が必要である。

## 5. 結論

本研究では、保育者自身の非認知能力が保育の質に与える影響について検討した結果、以下の知見を得た。

- (1) 肯定的自尊感情が保育実践力（生活環境の理解力、子ども理解に基づく関わり力、環境構成力）に影響を与えることが示された。
- (2) セルフコントロールが子ども理解に基づく関わり力、環境構成力に影響を与えることが示された。

今回の研究では、保育者のもつ非認知能力が保育の質に与える影響が示されたものの、影響力としては小さいものであった。しかしながら、影響力が示されたことで、保育の質を高めるための新たな視点が獲得できたと考えられる。今後は、他の非認知能力が与える影響についても検討するとともに、保育の質の捉え方についても検討していく必要がある。

### 注

注1) ここで扱う自尊感情とは特性自尊感情のことを指している。自尊感情にはパーソナリティ特性のような個人の安定的な特徴である特性自尊感情と、個人の経験や認知によって状態的に変化する状態自尊感情が存在しており、特性自尊感情は長時間をかけて緩やかに変化するとされている。非認知能力は短期間で劇的に変化する能力ではないため、本研究では特性自尊感情を自尊感情として扱っている。

### 付記

本研究の趣旨にご賛同いただき、ご協力くださいました保育者の皆様に深く感謝申し上げます。

### 引用文献

- 秋田喜代美・中山昌樹・太田亜希 (2015). 今, OECD など世界が注目している「社会情動的スキル」とは? (特集 子どもの未来につながる力を幼児期から育む). ベネッセ教育総合研究所『これからの幼児教育』, 2-9.
- 胡泰志・森野美央・加納章・山田恵次・久保徹平 (2020). フープを用いた運動遊びプログラムに関する研究—数量への関心及び非認知的能力に着目して—. 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, (6), 8-13.
- 遠藤利彦 (2017). 非認知的 (社会情緒的) 能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書. 国立教育政策研究所平成27年度プロジェクト研究報告書, 31, 1-281.
- 藤澤啓子・中室牧子 (2017). 保育の「質」は子どもの発達に影響するの—小規模保育園と中規模保育園の比較から—. RIETI ディスカッションペーパーシリーズ.
- 福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林渚・古川善也・森永康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーク自尊感情尺度の2側面—「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」—. 教育心理学研究, 65 (2), 183-196.
- 福留広大・森永康子 (2019). 自尊感情の2因子と2種類の自己愛の関連性. 広島大学心理学研究, (18), 107-126.
- Harms, T., & Clifford, R. (1980). Early Childhood Environment Rating Scale (ECERS). New York: Teachers College Press.
- Harms, T., Cryer, D., & Clifford, R. M. (1990). Infant/Toddler Environment Rating Scale. New York, NY: Teachers College Press.
- 橋本忠和 (2019). 幼児の社会情動的スキルを育む「ごっこ遊び」の造形表現活動についての—考察—3歳児の「魚釣りに行く」での活動分析を通して—. 美術教育学研究, 51 (1), 265-272.
- 八田清果 (2018). 保育の現状と支援に関する研究I—保育相談支援 (保護者支援) の実際からみえる保育者に必要とされるスキル—. 小池学園研究紀要, (16), 33-39.
- Heckman, J., Moon, S. H., Pinto, R., Savelyev, P., & Yavitz, A. (2010). Analyzing social experiments as implemented: A reexamination of the evidence from the HighScope Perry Preschool Program. Quantitative economics, 1 (1), 1-46.
- 井口真美 (2020). 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育の質向上に活かすために. 実践女子大学生活科学部紀要, (57), 19-36.
- 金子充 (2013). セルフ・コントロールに影響を与える先行要因の整理. 早稲田大学商学研究科紀要, (77), 121-137.
- 木村直子・橋川喜美代 (2008). 「保育実践力」尺度作成

- に関する研究—保育士・幼稚園教諭養成校教員の考える保育実践力を手がかりに—. 保育士養成研究, 26, 33-38.
- 黒澤寛己・横山勝彦 (2015). 運動部活動を活用した教師力向上政策:「教師教育」を視点に. 同志社スポーツ健康科学, (7), 1-8.
- 無藤隆 (2016). 生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか. ベネッセ教育総合研究所『これからの幼児教育』, 18.
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of psychosomatic research*, 62 (5), 589-594.
- 箕浦有希久・成田健一 (2015). 状態自尊感情の測定とその展望:状態—特性自尊感情の視点から. 関西学院大学人文論究, 65 (3), 1-17.
- 西川晶子 (2020). 非認知能力を育む乳児保育のための教材研究アクションリサーチ. 信州豊南短期大学紀要, (37), 51-76.
- OECD (2006). *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care—*.
- 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・沓澤岳 (2016). セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討. *心理学研究*, (2), 144-154.
- 清水和秋・吉田昂平 (2008). Rosenberg自尊感情尺度のモデル化: wordingと項目配置の影響の検討. 関西大学社会学部紀要, 39 (2), 69-97.
- 上山瑠津子・杉村伸一郎 (2015). 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連. *教育心理学研究*, 63 (4), 401-411.
- 埋橋玲子・岡部祐輝 (2019). 保育環境評価スケール (ECERS) の保育現場への導入—評価を改善に結びつける, 実践知の言語化のツールとして—. 同志社女子大学現代社会学会現代社会フォーラム, 15, 49-61.
- 山田秀江 (2016). 保育の質を高める保育者のスキルと態度. 四條畷学園短期大学紀要, 49, 27-32.